

速報：モニタリングサイト1000陸水域調査（湿原）植生調査

# サロベツ湿原サイト

－北海道天塩郡－

サロベツ湿原は、北海道北部のサロベツ川流域に広がる泥炭地湿原で、広大な湿原に加え、海岸側には海浜植生に続き、学術的にも貴重な砂丘林と砂丘間湿地・湖沼群が広がっています。多彩な植物群落が分布しており、湿原内で見られる維管束植物は360分類群にもものぼります。本サイトでは、サロベツ原生花園旧園地付近と泥炭採掘跡地近傍の2箇所に調査地を設置しています。湿原の開発や河川改修などの影響で湿原の排水・乾燥化が進行し、高層湿原や中間湿原へのチマキザサの侵入が問題となっています。



ライン2の様子。  
写真の手前部分にはササが侵入しています。



ライン1の高層湿原の様子。今年は季節が進むのが早かったのか、タチギボウシの葉には黄色く枯れた部分が目立ちます。  
また、花の終わった後の花茎（かけい）もあまり見あたりませんでした。

## 2020年度の調査結果概要

植生調査を8月12日から14日に実施しました。サロベツ湿原サイトでは、これまで、2009、2012、2014、2017年度に植生調査を実施しており、今回で5回目となります。

植生調査の結果を見ると、出現植物の被度は、調査当年やその前年の天候などに左右されるため変動がありますが、全体としては大きな変化は見られませんでした。サロベツ原生花園旧園地付近の調査ライン1は、湿地溝（湿原の自然の排水路）に近くササが優占する場所から、典型的な高層湿原に向かうラインですが、ササが出現しなくなる手前の2つの方形区のササの被度が2009年以降、次第に高くなってきていました。しかし、今回の調査では同等もしくは少し低下していました。下エベコロベツ川の改修の影響が見られる泥炭採掘跡地近傍の調査ライン2でも、ササの被度が明らかに増加している方形区があるため、今後もこれらについて注視する必要があります。

### 【調査者・調査協力者】

富士田裕子（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター植物園）、金子和広（北海道大学大学院農学院）、横地 穰（北海道大学大学院国際食資源学院）



8月4日から11日にかけての降雨量が多かったため、  
湿原への入り口付近は完全に水没し、車道付近まで冠水していました。



クサレダマ。  
湿地の植物で、低層湿原から中間湿原で見られます。



速報：モニタリングサイト1000陸水域調査（湿原）植生調査

# 霧多布湿原サイト

－北海道厚岸郡－

霧多布湿原は北海道東部の太平洋に面して広がる、国内で3番目の広さの湿原です。この地域は日本でもっとも冷涼な地域であるため、低地でありながらツルコケモモやガンコウランなど高山で見られる植物が多く生育しています。5月から8月には、ワタスゲの綿毛や、ゼンテイカ、ノハナショウブ、タチギボウシなど、様々な花が見られます。湿原の一部は「霧多布泥炭形成植物群落」として国指定の天然記念物に指定されており、ラムサール条約湿地にも登録されています。また、湿地を守る運動として日本で初めてナショナルトラスト運動が導入された湿原で、様々な形で保護の取り組みが行われています。



霧多布湿原の景観。



タチギボウシの花とチャミズゴケからなるブルテ（小凸地）。

## 2020年度の調査結果概要

霧多布湿原サイトは、2017年からモニタリングを開始し、今年度は2回目の調査でした。8月11日から12日に、30の方形区で植生調査を実施しました。調査地全体はヌマガヤ、ムジナスゲ、ワタスゲを主体とする中間湿原で、調査ラインの途中からパッチ状にチャミズゴケやスギゴケからなる直径1～2mくらいのブルテ（小凸地）が発達していました。チャミズゴケやスギゴケからなるブルテの上にはカラフトイソツツジ、ガンコウラン、モウセンゴケが見られ、ブルテごとに優占する維管束植物の種類が異なっていました。ヌマガヤの湿原にはヤチヤナギ、ツルコケモモ、ヨシ、ナガボノワレモコウが全体的に出現し、シュレンケ（小凹地）やその周辺ではミカツキグサ、ヤチスゲ、ユガミズゴケなどが、イボミズゴケやワタスゲの優占度が高い場所ではタチギボウシ、ヒメシヤクナゲが見られました。ヌマガヤの湿原、チャミズゴケからなるブルテともに、乾燥が進んだ方形区ではノリウツギやススキの侵入が見られました。

調査地全体で、前回調査と比べて顕著な変化は見られませんでした。

### 【調査者・調査協力者】

加藤ゆき恵（釧路市立博物館）、持田 誠（浦幌町立博物館）、内田暁友（蘚苔類研究者）



モウセンゴケの花。



方形区内の植生を調査する様子。



ミカツキグサ。  
シュレンケ（小凹地）に見られました。



チャミズゴケからなるブルテ上に生育するさまざまな植物。  
スギゴケ、イボミズゴケ、ガンコウラン、カラフトイソツツジ。

モニタリングサイト1000陸水域調査（湿原）についてもっと知りたい方はこちらにアクセスしてください。

モニタリングサイト1000陸水域調査（湖沼・湿原）の過去の調査報告書  
<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>

モニタリングサイト1000陸水域調査 湿原調査マニュアル第5版  
[http://www.biodic.go.jp/moni1000/manual/marshes\\_manual\\_ver5.pdf](http://www.biodic.go.jp/moni1000/manual/marshes_manual_ver5.pdf)



速報：モニタリングサイト1000陸水域調査（湿原）植生調査

# 八甲田山湿原サイト

—青森県十和田市—

青森県南部に位置する火山群である八甲田山系には、低標高域から高標高域まで、小規模な湿原が多く点在しています。世界でも有数の豪雪地帯であり、湿原群は過去の火山活動や積雪の影響で成立した環境であると考えられています。八甲田山湿原サイトでは、硫黄岳（標高1,360m）および石倉岳（標高1,202m）の南部に位置する高田谷地湿原に調査地を設定し、6箇所に各20mの調査ラインを設定し、それぞれ5個の方形区（計30方形区）を設置しています。



シュレンケ（小凹地）に見られるミカヅキグサと  
周辺を黄色に彩るキンコウカ。



コバノトンボソウ。  
湿原で良く見られるランの仲間です。

## 2020年度の調査結果概要

植生調査を8月8日に実施しました。八甲田山湿原サイトでは、これまで、2009、2011、2014、2017年度に植生調査を実施しており、今回で5回目となります。

今回の調査では、35種が確認されました（2009年は34種、2011年は32種、2014年は35種、2017年は38種）。全体的には、ヌマガヤ、キンコウカ、ミヤマヌノハナヒゲ、ワタスゲが優占しており、前回調査と比べて、種組成に大きな変化は見られませんでした。ただし、前回の調査時と同様に、湿原の入り口付近でのヨシの生育が目立ちました。

種数や種多様性については大きな変化は見られませんでした、今後も注意深くモニタリングしていく必要があります。

【調査者・調査協力者】

佐々木雄大・土橋由依・巻島大智・石井直浩（横浜国立大学）



ミヤマホソコウガイゼキショウの果実。



現地調査の様子。  
方形区内の植物の種類や被度を目視で調べています。



サワギキョウの花。  
湿原の縁辺に群生していました。



ナガボノワレモコウ。  
ナガボノシロワレモコウと呼ばれることもあります。

モニタリングサイト1000陸水域調査（湿原）についてもっと知りたい方はこちらにアクセスしてください。

モニタリングサイト1000陸水域調査（湖沼・湿原）の過去の調査報告書  
<http://www.biodic.go.jp/moni1000/findings/reports/index.html>

モニタリングサイト1000陸水域調査 湿原調査マニュアル第5版  
[http://www.biodic.go.jp/moni1000/manual/marshes\\_manual\\_ver5.pdf](http://www.biodic.go.jp/moni1000/manual/marshes_manual_ver5.pdf)